

公認会計士「研修出向制度」 体験者レポート

vol. 13 取材・文/南山武志 撮影/大平晋也

新日本有限責任監査法人が2010年にスタートさせた、一般事業会社への会計士「研修出向制度」。本制度を活用し、自己成長に励む公認会計士たちのリアル・レポートをお届けする。



制度の実情を知り 1年後に、挙手

— 大学を卒業後、いったん事業会社に就職なさっています。

黒田 1999年の卒業なのですが、当時盛り上がりつつあった情報システム系の仕事ができればと思い、NTTのグループ企業に入りました。ただ、配属された部署が、自分のやりたいと思っていた分野とは少し違っており、業務を続けるのが辛くなってしまった。結局2年で転職を決意しました。

— 会計士になろうと思ったのはなぜですか？

黒田 その時、元々自分のやりたかったことは何だったのか、立ち戻ってみたんです。学生時代には漠然と企業経営に興味があつて、経営関係のゼミに入っていました。ここはやはり初心に帰るべき、と思つたわけです。改めて経営のアドバイザー的な仕事をしてみたいと考え、その方向を目指すことにしました。ただすでに新卒ではないので、普通に再就職しようとしても厳しい。そこで、まず公認会計士の資格取得を目指すことを決めました。

— 実際には監査の仕事をするこゝになつたわけですが。

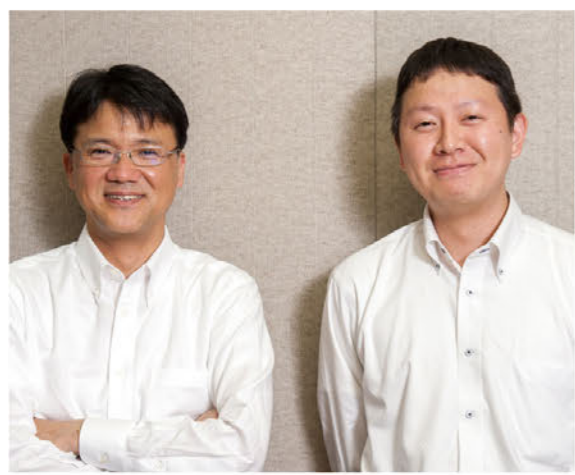
黒田 学生時代から、人から「ありがとう」と言っていただけのような仕事を頑張りたいと強く思っていました。監

実はすぐに手を挙げていけば、出向の「1期生」になつたのですけど、制度がどのように運用されるのか不安がなかつたわけではなく(笑)、1年目は様子を見ることにしました。現場の責任者になつてまだ2年目ぐらいだったので、もう少し監査の経験を積みた方がいい、という思いもありました。ただ実際に出向した同期の人の話を聞いても、一般の社員の方と分け隔てなく働いていることがわかりました。それこそ自分の求めるものだと確信し、翌年、満を持して応募したわけです。

「会計基準ありき」と異なるベクトル

— 実際に、サントリーで仕事をしてみて、いかがでしたか？

黒田 監査法人で担当していた企業に比べても、「こういうビジネスをした



のだから、数字はこうなるはず」という経理としてのスタンスが非常に明確なことに、まずは驚きました。もちろん、非上場企業だから、という甘さのようなものは、一切ありませんでした(※7月3日にグループ企業のサントリー食品インターナショナルが上場)。経理では連結決算を担当するグループにいますが、他グループの方も含めて、会計処理の仕方について相談を受けることがしばしばあります。その反対に、仕事に対する姿勢など、毎日多くのことを学ばせてもらっています。

— 監査する立場とのベクトルの違いには結論が出ましたか？

黒田 監査法人時代には、企業のことを理解しているつもりでも、最終的には「まず会計基準ありき」になっていました。だから、しばしば「基準がこうなっているのに、なぜそのとおりにやってくれないのか」ということになる。しかし企業側からすると、自分たちの出した数字は、単に電卓をたたいてつくつたものではないんです。「実際にビジネスを行えば、このように表現されるはずだ」というこだわりがやはりある。もちろん、それを100%認めればいいということではありませんが、そうした企業の思い、ベクトルを体感できたことは、いろんな意味で大きかったと思っています。

— これからの課題、目標を教えてください。

事業会社の経理がつくる 数字へのこだわりを体感中。 とても貴重で得難い経験



サントリービジネスエキスパート株式会社ビジネスシステム本部 経理センター
黒田和哉 ● 37歳

査法人入所後3、4年は、現場担当者の下で具体的な数字を見て、企業の方ともわりとフランクに話ができる立場にあります。経理の方がこちらの話に納得して、「ありがとう」と声をかけてくれるようなことも多かったのです。直接、経営に対して云々はありませんでした。監査の仕事には非常にやりがいを感じました。

— 出向制度に応募した理由を聞かせてください。

黒田 キャリアを積んで自分が若手ス

ださい。

黒田 今の話でいうと、企業は企業で、監査法人とのベクトルの違いにとまどっているわけです。いろんな局面で監査の目線からもアドバイスをを行い、企業の方々に多彩な視点を持ってもらうことが、私の存在意義だと認識しています。とはいえ、現実にはまだまだ修業が足りないと感じることだらけ。できるだけ多くのプロジェクトに顔を出させていたでいて、会計士ならではの貢献ができれば、と思っています。

— 若い会計士へのメッセージを。

黒田 自分自身、予想以上に仕事に対する視野や可能性が広がった実感があります。何が何でも監査一本でいく、と決めている人はそれでいいけれど、少しでも外に出てみたいという考え、迷いがあったら、この制度は真剣に検

タッフを束ねて監査を行う立場になつてくると、企業の方と意見のぶつかることが多くなってきたんです。会計監査という業務の性格上、そのこと自体は悪いことではないと思うのですが、そもそも企業側と監査する側の数字に対する見方、ベクトルの違うことが大きな原因だ、と感じるようになってきました。実際に事業会社に入れば、その違いの正体ははつきりすることはないか、それを知るのには意味のあることだろうと考えたのが大きな理由です。

討してみる価値のあるものだと思います。3年間という出向期間の「プランク」を気にする人もいるでしょう。でも、知らなかつた世界を知る。意義もまた、何ものにも代えがたい価値となるはず。理屈抜き、僕の場合はこの2年間、毎日が楽しくて、あつという間に過ぎてしまいましたから。

Kazuya Kuroda Profile

1976年7月11日 東京都大田区生まれ
1999年3月 中央大学経済学部 産業経済学科卒業
4月 エヌ・ティ・ティ・ソフトウェア株式会社入社
2001年12月 同社退職
2004年12月 公認会計士第二次試験合格
2007年7月 中央青山監査法人入所
2011年7月 新日本有限責任監査法人入所
サントリービジネスエキスパート株式会社へ出向

家族構成=妻、娘1人、息子2人

出向受け入れ企業の声

業務遂行能力は期待以上!
既存社員も刺激を受けている



サントリービジネスエキスパート株式会社 執行役員 経理センター長

石川一志

経理センターはサントリーのグループ会社のうち規模の大きな十数社の経理業務を一手に引き受けている。各社の経理業務を担うグループと連結決算のように全体を見るグループがあるが、黒田君には後者を担当してもらっている。

当センターは、人員構成の面で中堅の層が薄いという事情があり、かつ昨今の会計の高度化、複雑化、グローバル化の進展のもと、スキルのある即戦力がぜひとも欲しかった。この制度について初めて聞いた時には、どんな人が来てくれるのか、正直不安もあったのだが、黒田君は「当たり前」だった。周囲のレベルアップも含め、経理基盤の強化に寄与してくれている。翌年にも1名の出向をお願いし、別に1名の会計士を中途採用した。彼らの貢献を見て、経理にも会計士の知識や技術が必要な時代だと、再認識している。